



Title	複式学級における特別支援教育の「困り感」と「よさ」： 八重山教育事務所圏内の教員に対する質問紙調査から
Author(s)	照喜名, 聖実; 田中, 敦士; 細川, 徹; 森, 浩平
Citation	琉球大学教育学部紀要 = Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus(87): 167-174
Issue Date	2015-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32435
Rights	

複式学級における特別支援教育の「困り感」と「よさ」 —八重山教育事務所圏内の教員に対する質問紙調査から—

照喜名 聖実¹⁾, 田中 敦士²⁾, 細川 徹³⁾, 森 浩平⁴⁾

A Survey about Difficulties and Merits of Special Needs Education in Combined Classes
-A Questionnaire Survey of Teachers within the Range of Yaeyama Education Office-

Mitami Terukina¹⁾, Atsushi Tanaka²⁾, Toru Hosokawa³⁾, Kohei Mori⁴⁾

要 約

本研究では、八重山教育事務所圏内の小中高等学校に勤務する教員の複式学級における特別支援教育への「困り感」と「よさ」を明らかにすることを目的とした。問題が山積する複式学級を有する小規模校において、複式学級における特別支援教育の実態を把握するため、質問紙調査を行った。調査項目として、フェイスシートのほか、「複式学級という学級形態が特別な支援を必要とする子どもに与える影響」、「離島ならではの特別支援教育に関する取り組み」の2項目を自由記述形式で設定した。更に、前者の回答結果は「特別支援教育に関する困り感」と「よさ」の2つの観点に分けて分析した。その結果、複式学級を担当する教員の多くが複式指導と特別支援教育の2つの困り感を抱えていること、よさとして、複式学級における異学年との関わりが児童生徒に良い影響を生むと多くの教員が考えていることが明らかとなった。そのようなよさには豊かな自然環境や地域・家庭と学校の結びつきが深く関わっていることも明らかとなった。

キーワード：複式学級、離島、特別支援教育、困り感

I 問題と目的

1. 沖縄県におけるへき地教育の現状

村田・平岡(2006)によれば、沖縄県(小; 36.3%、中; 43.3%)のへき地等指定学校の割合は、全国平均(小; 14.6%、中; 13.4%)を上回っており、高い水準にあるとされる。また、複式学級の割合は小学校において沖縄県 4.0%、長崎県 6.0%で全国平均 2.2%を上回っており、中学校においても沖縄県 1.1%、長崎県 0.9%で全国平均 0.2%を大きく上回っている。これは、沖縄県、

長崎県がともに離島を多く抱えた地域であることに起因する。

また、沖縄県教育委員会(2007)が「教職員は、在任期間中に、県費負担教職員にあってはへき地を、県立学校教職員にあっては離島地区又は北部地区を経験するものとする」と明示しているように、沖縄県内勤務の教員にとって、離島へき地勤務は避けては通れない道である。その赴任先である離島地域には、複式学級を有する学校が存在する島が含まれるため、複式学級の担任になる可能性が高いと推測される。

1) 琉球大学大学院教育学研究科

2) 琉球大学教育学部

3) 東北大学大学院教育学研究科

4) 東北大学大学院教育情報学教育部, 日本学術振興会特別研究員

2. 統廃合の背景

昨今、地方においては、市町村による小規模校の統廃合が進んでいる。その要因として、安田(2009)は、「国・地方自治体ともに財政状況は厳しく、今後、長期的には教育人口の減少が見込まれる中、教員・学校施設とも現在の規模を維持するのは難しい」としており、地方自治体における財政的な問題を理由に統廃合へと向かう傾向にあることを示唆している。

石垣市もその類にもれず、「石垣市立幼稚園・小学校及び中学校における学校適正化計画」と冠した学校規模適正化計画を進めている。小規模校における複式教育に関して石垣市教育委員会(2006)は、「家庭的な雰囲気や個に応じた指導が容易である」などのメリットを挙げていながら、「配置される教員数が少なく、一人一人の教員の負担が大きく、特に複式学級の教員に係る負担は大きく、ゆとりある充実した授業体制がとりにくい」などのデメリットを挙げ、小規模校を存続するよりも、統廃合を行って、多人数教育を実施する方が教育的効果は高いとしている。

石垣市と隣接する竹富町でも同様の計画が進行しており、数校の小中学校の統廃合が検討されている。竹富町は、1968年の網取小中学校の廃校、1975年の上地小学校の廃校と、二校の廃校とそれに伴う廃村を経験してきており、廃校即ち廃村という図式が地域住民の共通認識になっている。財政難の解消のために統廃合を推し進めようとする地方自治体と、地域の存続を望む地域住民の間に軋轢が生じているため、今なお地域住民の反発が強い。

3. 複式学級における2つの困り感

上述したような統廃合が検討されている小規模校の多くは、在籍している児童生徒数が単式学級の設置可能人数に達しておらず、複式学級を有している。その複式学級の指導に関しても、様々な問題が生じている。

八田(2009)は、「教員であれば、複式学級の指導はすぐできる、という誤解もある。普通の授業と同じように二つの学年を交互に授業すれば良いと思って授業すると、間接指導の時の指導を疎かにしてしまう」と述べている。このように、複式

学級を初めて担当する教員が複式学級の指導(以下複式指導)に対して誤解を持つ場合がある。そのため、実際に複式指導を行った際、学習課題の設定や間接指導の困難さなどの「困り感」を覚える教員は少なくないと考えられる。

また、文部科学省(2012)の調査によれば、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は、全体の6.5%と言われており、複式学級においても同様の傾向が見られると考えられる。そのため教育現場において、全国各地の複式学級を担当する教員が、複式指導に加えて特別支援教育に対する「困り感」を抱えているケースが少なくないと推測される。

4. 八重山諸島が持つ魅力

沖縄県八重山諸島は、船など交通手段が限られていること、豊かな自然があり、学校と地域の結びつきが強いなど離島の特徴を備えている。県内外から八重山諸島へ移住してくる住人の多くは、「豊かな自然と魅力ある景観」、「生き生きと維持されている多様な伝統文化」、「素朴で静かなくらし」、「人の温かさ、豊かな人情(助け合い)」(内閣府沖縄総合事務局, 2010)など都会にはない魅力に惹かれている。この豊かな環境の中で行われる複式教育や特別支援教育にも、離島の魅力が「よさ」として現れるはずである。

5. 本研究の目的

上述したように、八重山諸島における複式学級を有する小規模校は、複式学級を担当する教員が複式指導に加えて特別支援教育に対する「困り感」を抱えていることや、市町村の財政難により統廃合が検討されていることなど多くの問題を抱えている。しかし、課題点を列挙するだけでは、八重山諸島における複式学級を有する小規模校の全容を把握しているとは言えない。

以上のことから、本研究では、離島の特徴を備えている八重山諸島において、小中高等学校に勤務する教職員への質問紙調査により、複式学級における教員の特別支援教育への「困り感」と、「よさ」を明らかにする。それによって、八重山諸島における複式学級を有する小規模校の複式学級における特別支援教育の全容を把握し、八重山教育

照喜名ほか：複式学級における特別支援教育の「困り感」と「よさ」 一八重山教育事務所圏内の教員に対する質問紙調査から一

事務所圏内の複式指導及び特別支援教育の課題を明らかにすることを目的とする。

II 方法

1. 調査対象

八重山教育事務所圏内小中高等学校に勤務する教職員 52 名を対象とした。

2. 手続き

平成 26 年 7 月 22 日に質問紙調査を行った。

平成 26 年度沖縄県教育委員会による教育職員免許法認定講習を受講した八重山教育事務所圏内小中高等学校及び特別支援学校に勤務する教職員 52 名に対して、休憩時間を利用して、調査の趣旨や目的を説明し、調査票を配布した。個人が特定されないよう無記名とした。

3. 調査内容

質問紙調査の質問項目及び調査の観点は表 1 の通りである。

表 1 質問項目及び調査の観点

質問項目	調査の観点
A. 複式学級という学級形態が、特別な支援を必要とする子どもにどのような影響を与えますか。	①複式学級における特別支援教育への「困り感」 ②複式学級における特別支援教育の「よさ」
B. 特別支援学級や担当クラスで行われていた「離島ならではの特色ある特別支援教育の取り組み」と考えられるものについて、よい例があれば教えてください。	③離島ならではの特別支援教育に関する取り組み

III 結果

1. 回答者の基本属性

回収率は、認定講習受講者 61 名中 52 名で 82.5%であった。回答者の男女比は、男性 38.5%、女性 61.5%であった。

回答者の勤務学校に関しては、小学校 44.2%、中学校 26.9%、高等学校 25.0%並びに無回答 3.8%であった。学校種別に見ると、小学校が最

も多く、次いで中学校、高等学校と続いた。

また、採用種別の割合としては、本務採用教員が 71.2%、臨時採用教員が 25.0%、その他(学習支援員)が 3.8%であった。回答者の教職経験総年数について、5 年未満を若手、5 年以上 10 年未満を中堅、10 年以上をベテランとした。若手が 25.0%、中堅が 38.5%、ベテランが 36.5%であった(表 2)。

表 2 教職経験総年数

(ヶ月)

教職経験総年数	人数(名)	割合(%)	平均	標準偏差	最長	最短
若手	13	25.0	29.8	15.8	52.0	10.0
中堅	20	38.5	92.8	19.5	124.0	60.0
ベテラン	19	36.5	200.4	55.5	300.0	135.0
n	52	100.0	116.4	77.4	300.0	10.0

回答者の特別支援学校における教職経験総年数については、若手が 5.8%、中堅が 0%、ベテラ

ンが 1.9%であった。また、経験なしと答えた回答者が大多数であり 92.3%であった。

回答者の八重山諸島における教職経験総年数は15.4%であった。無回答が7.7%であった(表3)。は、若手が59.6%、中堅が17.3%、ベテランが

表3 八重山諸島における教職経験総年数 (ヶ月)

教職経験総年数 (八重山諸島)	人数(名)	割合(%)	平均	標準偏差	最長	最短
若手	31	59.6	27.8	18.9	88.0	3.0
中堅	9	17.3	89.1	19.9	120.0	60.0
ベテラン	8	15.4	214.5	38.9	300.0	168.0
無回答	4	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0
n	52	100.0	65.0	72.1	300.0	0.0

2. 複式学級における特別支援教育への「困り感」 異学年との関わりに関する記述が3件、授業に対する指導・対応が7件、教員のスキル、教材研究・授業準備、施設・設備・体制に関する記述が各1件であった。異年齢との関わり、授業における指導・対応への「困り感」を抱いているとの回答が多く見られた(表4)。

表4 複式学級における特別支援教育への「困り感」

【異学年との関わり】

- ・学級一人ひとりの持つ負担が大きすぎる。例えば、5人中2人支援を必要としているなら、それぞれ1人が対象児1人ずつを支援していた。
- ・関係が良くないと、上下の関係で接し方に問題が生じたりして収拾が付かなくなることもある。
- ・年下の子にも苦手なものやできないことを見られてしまう精神的な不安や苦痛を感じさせてしまう。

【授業における指導・対応】

- ・個別支援をする時間帯が減ってしまう。自分の学習している内容がごちゃごちゃになってしまう。
- ・低学年の複式においては、他の子にも手がかかるため、支援を十分にすることができないことが多い。その反対に他の子が十分な指導を受けられないことも多い。
- ・十分な支援が行えないことがある。他の子たちがしっかりして、学習の遅れも学びの姿勢もしっかり身につけているなら、助け合いや学びあいができるのではないか。
- ・授業を進めることを優先してしまい、一人ひとりのつまづきを見落とす恐れがある。
- ・その子の発達段階に合った適切な授業という点はなかなか難しい。
- ・複式+特別な支援を要する児童がいる場合は担任の先生がとても大変だと思う。担任が指導で迷うことが該当児童によくないのではないか。
- ・教師の力量次第である。複式に対応できていない教師の学級では細かい支援が難しくなる。

3. 複式学級における特別支援教育の「よさ」 異年齢との関わりに関する記述が14件、授業に対する指導・対応が2件、教員のスキルに関する記述が1件であり、異学年の関わりや授業における指導・対応が「よさ」を生んでいるとの回答が多かった(表5)。

表5 複式学級における特別支援教育の「よさ」

<p>【異学年との関わり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異年齢の仲間と関わりながら自分のペースで学習を進めることが可能である。 ・年長者と年少者が相互に相手に対する礼儀、とるべき行動、言葉づかいなどを学習できる。 ・うやまう、良い見本になる、年上、年下としての意識が高まる、面倒見が良くなる。 ・社会性を育てる面で、有効になる環境が作られる。異年齢からの刺激が得られる。 ・上学年の子の支援が受けれていいかなと思う。 ・少人数の指導で異年齢児童との交流がいい効果を生むと思う。 ・通常の学級の児童とのかかわりの中で、社交性や社会性、コミュニケーション能力について学べる。 ・周囲の児童の理解が得られやすい。 ・集団行動の中で社会性が身に付く。 ・異年齢との関わりがよい効果を生む。 ・良い関わりができれば、クラスの雰囲気良くなり、互いに支えあったり、見本となって示すことができる。 ・思いやり、支えあい、という点ではいい。 ・年下の子に理解してもらえれば、気にせず教えてもらえる。 ・異学年の児童とのかかわりは、その子にとっても良い影響があると思う。
<p>【授業における指導・対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の力量次第であり、複式に対応できる教師の学級では細かい支援ができる。 ・高学年になると、人間関係が密になるので、上手くいけば安定した学校生活ができる。

4. 離島ならではの特別支援教育に関する取り組み 件、豊かな自然に関する記述が3件あった。地域との関わり、少人数指導、豊かな自然に離島に関する記述が5件、少人数指導に関する記述が7 しさがあるという回答が多く挙げられた(表6)。

表6 離島ならではの特別支援教育に関する取り組み

<p>【地域との関わり】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どものときから地域が成長を見守っており、その子を受け入れる基盤ができていますので子どもが伸び伸びと成長しやすいように感じる。 ・落ち着いた生徒がハーリーに参加したり、旗頭をしたり、と表舞台に立つ機会があるのでいい。伝統芸能は高齢者だけのものではなく、地域柄小さい子から高齢者まで大好きで認められているので、支援に関わらせていくことができるといい。 ・地域の人たちが子ども達を知っている、理解してくれていて積極的に関わってくれる。 ・他人も家族同然、学校も家族同然、温かく見守り、成功体験をさせることによって自己達成感が充実する。 ・地域行事への参加や自然体験が盛んである。
<p>【少人数指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級での学習内容を補うため、支援を要する児童に対して個別に教務主任が支援していた。 ・普通学級に在籍しているが、通常授業ではついていくのが困難な生徒を取り出して、学習支援をしている。少人数で行くと落ち着ける。取り出し学習も悪くないと感じる。

- ・少人数で、密に関わりが持てるので、子どもの成長を手厚い支援をもって見守ることができる。子どもにとっても安心感がある。
- ・みんながその子を知っているので指導・対応についてもアドバイスしてもらえらる。
- ・分け隔てなく、子ども達が接することができる。
- ・幼小中併設校等で全体が見えやすいこと。県外から、障害に悩む家庭が移住してきており、自然環境があり、小さな学校なら、と期待している。
- ・幼小中併設校として、情報交換が行いやすい。小学校での様子が聞きやすい。

【豊かな自然】

- ・自然の中で遊ぶことができる。
- ・交流学习、交流教育が盛んであること。
- ・県外から、障害に悩む家庭が移住してきて、自然環境があり、小さな学校なら、と期待している。

IV 考察

1. 複式学級における特別支援教育への「困り感」
授業において指導・対応に関する困り感を抱えている教員が多いことが明らかになった。

これらを分析した結果、それぞれの記述を2つの要素に分類することが出来た。例えば、「低学年の複式においては、他の子にも手がかかるため、支援を十分にすることができないことが多い。その反対に他の子が十分な指導を受けられないことも多い」という記述は、「低学年の複式においては、他の子にも手がかかる」、「他の子が十分な指

導を受けられないことも多い」という異学年対応に関する困り感に言及している箇所と、「支援を十分にすることができないことが多い」という特別な支援を要する児童生徒への対応に関する困り感について言及している箇所に分類することができる。この他に「一人ひとりのつまづきを見落とす恐れがある」など、双方の困り感に該当する記述も見られた。このように、特別な支援を要する児童生徒が在籍する複式学級において、教員が異学年対応に関する困り感と特別な支援を要する児童生徒への対応に関する困り感を有していることが明らかになった(表7)。

表7 授業における指導・対応に関する困り感の分類

授業における指導対応に関する困り感	
異学年対応に関する困り感	特別な支援を要する児童生徒への対応に関する困り感
・複式学級において授業をするだけで大変。	・複式+特別な支援を要する児童がいる場合は担任の先生がとて大変だと思う。 担任が指導で迷うことが該当児童によくないのではないか。
	・個別支援をする時間帯が減ってしまう。 ・自分の学習している内容がごちゃごちゃになってしまう。
・低学年の複式においては、他の子にも手がかかる。	・支援を十分にすることができないことが多い。 ・他の子が十分な指導を受けられないことも多い。 ・十分な支援が行えないことがある。
・複式に対応できていない教師の学級 ・授業を進めることを優先してしまう。	・特別な支援を要する児童生徒への細かい支援が難しくなる。
・一人ひとりのつまづきを見落とす恐れがある。	
・その子の発達段階に合った適切な授業という点はなかなか難しい。	

このことより、八重山教育事務所圏内で勤務する教員の多くが、複式指導と複式学級における特別支援教育に困り感を持っていることが示唆された。

2. 複式学級における特別支援教育の「よさ」

「年長者と年少者が相互に相手に対する礼儀、とるべき行動、言葉づかいなどを学習できる」、「うやまう、良い見本になる、年上、年下としての意識が高まる、面倒見が良くなる」等の記述が挙げられた。このことより、多くの教員が、複式学級における異学年との関わりが特別な支援を要する児童生徒に良い影響を与える、と考えていることが明らかになった。これは、異学年が一つの学級の中で学校生活を送る中で生まれる効果である。「周囲の児童の理解が得られやすい」、「良い関わりができれば、クラスの雰囲気良くなり、互いに支えあったり、見本となって示すことができる」などの記述も同様の結果を表している。周囲の児童生徒が特別な支援を要する児童生徒の障害に対して理解し、自然に接することが、自然なインクルーシブ教育に繋がっているとの回答も見られた。このことは、これは、固定された学習集団の中で、学齢期において途切れない人間関係が構築できることに起因する。

3. 離島ならではの特別支援教育に関する取り組み

離島ならではの特別支援教育に関する取り組みとして、「他人も家族同然、学校も家族同然、温かく見守り、成功体験をさせることによって自己達成感が充実する」という記述が見られた。これは、他の教員の「子どものときから地域が成長を見守っており、その子を受け入れる基盤ができていたので子どもが伸び伸びと成長しやすいように感じる」という回答から読み取れるように、地域全体が特別な支援を要する児童生徒を小さい頃から継続的に見守っていくことで、地域住民に自然と障害理解が生まれることに起因する。特別支援を要する児童生徒の成功体験の具体例として、ある教員が「落ち着いた生徒がハーリーに参加したり、旗頭をしたり、と表舞台に立つ機会があるのがいい」と例を挙げていた。「伝統芸能は高齢者だけのものではなく、地域柄小さい子から高

齢者まで大好きで認められているので、支援に関わらせていくことができる」との回答も見られた。このことから、特別な支援を要する児童生徒が伝統行事に参加し、活躍することで地域住民が児童生徒を理解し積極的に関わる契機となることが示唆された。これらを総合して見ると、特別な支援を要する児童生徒が地域との関わりの中で伸び伸びと成長していることが読み取れる。少人数指導に関する記述の中で、「少人数で、密に関わりが持てるので、子どもの成長を手厚い支援をもって見守ることができる。子どもにとっても安心感がある」という記述には、少人数指導による児童生徒の実態の把握しやすさ、そこから生まれる児童生徒の安心感が述べられている。その安心感によって、「分け隔てなく、子ども達が接することができる」など児童生徒同士が障害のあるなしに関係なく関わりあえるよい状況が生まれていることが考えられる。その中で「みんながその子を知っているので指導・対応についてもアドバイスをしてもらえる」など、教員だけでなくその他の児童生徒も、特別な支援を要する児童生徒への適切な指導・支援の方法が自ずと身につくのである。そのような整った環境の中で、「県外から、障害に悩む家庭が移住してきており、自然環境があり、小さな学校なら、と期待している」など特別な支援を要する家族も期待し、安心できる学習環境が作られるのではないだろうか。

V 付記

本研究は平成26年度科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究 課題番号：26590217 研究代表者：田中敦士）により行った。

本研究を進めるにあたり、質問紙調査にご協力いただきました八重山事務所圏内の小中高等学校及び特別支援学校に勤務する教職員の皆様からお礼申し上げます。その他本研究を進めるにあたってご協力、ご助言をいただいた方々に重ね重ねお礼申し上げます。

VI 引用文献

- 1) 八田明夫 (2009) 複式学級の社会的意義, 大学と学校現場の連携による離島・僻地教育の推進, 三大学の連携による離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成, 一大学教員と小・中教員の相互訪問授業を軸として一, 長崎大学教育学部 (編), 122-125.
- 2) 石垣市教育委員会 (2006) 石垣市立幼・小・中学校における学校適正規模・適正配置計画の基本的な考え方.
- 3) 文部科学省 (2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について.
- 4) 村田義幸・平岡賢治 (2009) 長崎県・鹿児島県・沖縄県におけるへき地教育について, 大学と学校現場の連携による離島・僻地教育の推進, 三大学の連携による離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成, 一大学教員と小・中教員の相互訪問授業を軸として一, 長崎大学教育学部 (編), 29-38.
- 5) 内閣府沖縄総合事務局 (2010) 沖縄における今後の離島振興策に関する調査.
- 6) 沖縄県教育委員会 (2007) 教職員の採用及び異動, 平成 19 年度公立学校教職員人事異動方針.
- 7) 安田隆子 (2009) 学校統廃合一公立小中学校に係る諸問題一, 調査と情報 640, 1-10.